
異世界に刺激を求める者

ゆで卵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に刺激を求める者

【Nコード】

N5538Y

【作者名】

ゆで卵

【あらすじ】

ある世界に一人の少年がいた。その世界では少年にかなう人はいなかった。まわりにはいた人は少年のことを避けるようになった。それは、少年の近くにいたら自分が劣って見えてしまうと思ったからだ。そのせいで少年は自分と一緒にいることができるのは自分の才能と同等のものをもった者じゃないと思うようになり才能を持たない人を自分と同じ人とは見なくなった。しかし、どこかでは他人と一緒にいたい、頼りたい、自分の力を思うままぶつけたいと思っていた。そんな時、その少年の目の前に白い門が現れ、門の奥に自

分よりも強い存在、自分を楽しませてくれる存在を求め、その門をくぐった。その先には今までとは全く異なった世界が広がっていた。そこで少年は自分より強い存在に出会い、人生を楽しむのだった。

初めての作品なので文章がおかしいかもしれませんがそこは大目に見てください。

プロローグ

日が暮れ始め、人々が夕食の準備のために慌てているとき、黒髪の少年が通りの端で一人たたずんでいた。その少年の目には光が宿っていないように見えた。まるで、この世界に対して、あきらめを感じているかのようなだった。

「何か面白い事ないかな……………」

その少年が退屈そうにつぶやいた。

『刺激が欲しいか??』

「
ツ!」

突如、男の声がした。少年はあたりを見渡すが少年の周りには誰もいなかった。

『刺激が欲しいか??』

またしても、男の声がした。

「何なんだ?!?」

少年はもう一度あたりを見渡すがやはり誰もいなかった。

『もう一度問う』

汝、刺激を求めるか??』

男の声がした。そして、少年は気がついた。男の声が周りからしているものではなく、頭に直接響いてる事に…………。

「…………刺激とはなんだ??」

少年は、男の声に返事をしてみた。

『刺激とは刺激』

人生を面白くさせるもの』

「人生を面白くさせるもの、か…………」

『そうだ』

「……………」

少年は目を閉じて何かを考え、そして

「俺は、今まで色々な事に挑戦してきた。空手、剣道、柔道、いろいろな事にだ。だが、どれも俺とまともに戦える人間は一人もいなかった……」

俺を満足させる人間はいなかった。お前の言う刺激は俺を満足させる事が出来るのか??」

少年は男の声に問いかけた。

『出来る』

「ならば、俺はその刺激を求める。
いや、俺は……」

その刺激が欲しいっ！！！！」

少年は周りを気にせず、大声で叫んだ。

『ならば、この門をくぐるがよい
さすれば、汝が求めるものが得られるだろう』

男の声がそう言った次の瞬間、少年の前に白い門が突如出現した。
そして、少年は迷うことなくその門をくぐった。

第1話 始まり

「暑い……」

少年の顔には大粒の汗が滝のように流れていた。何故少年がこんなに汗をかいているかと言うと、彼が今、砂漠のど真ん中に立っているからだ。

「暑い……」

少年は自分の体を見たが、汗をふける物が無かったので、自分の手で汗を拭った。がそれはあまり意味のないことだった。なぜなら、拭ってもすぐに汗が溢れてしまうからだ。

「このままでは、脱水症状で死んでしまう」

少年はこれからどうするか考えているがあまり良い策は浮かばなかった。

「異世界に送るなら、もっと良い場所に送って欲しかった……」

少年は文句を言っているがその顔には悲壮感はなかった。むしろ、この状況を楽しんでいるかのように見えた。

「とりあえず、前に進むか」

少年はそう言って北へと歩き始めた。

少年が北へと歩き始める小一時間ほど前少年の位置から北に30kmほど先にある町に沢山の人が集まっていた。そいつらは皆、剣や槍、弓などの武器を持っていた。

「あゝっいゝ」

その集団の中にいた一人の少女がつぶやいた。

「どうしてここはこんなに暑いのか」

先ほどの発言からあまり時間がたたないうちにまたしても少女がつぶやいた。

これで何回目であろうか。少なくともこれで10回以上はつぶやいていた。

周りにいる人間もさすがにこの発言いらしてきたので文句を言おうとその発言者の方を見て、そして、何も言わなかった。いや、言えなかった。なぜなら、その発言者がもの凄い美少女で見とれてしまったからだ。美しい黒い長髪、宝石のような黒い瞳、みずみずしい白い肌、その美貌は同性でも惚れこんでしまうほど美しかった

……

「どうやら参加者が全員、集まった様だな。我は、この討伐隊の隊長を任されたガルバドだ。皆、よろしく。では、これより危険度E・砂漠デカミミズの討伐に向かう。皆、われの後に続け!!」

と、が体の良い筋肉隆々の男が大きな声で言った。そして、そこに集まった人々が、その男の後に続いた。もちろん、その中には先ほどの美少女もいた。

第2話 初めての戦闘

「生き返るーっ!!」

少年は小さな池に顔をつけて、水を一気に飲み喉をうるおしていた。

「砂漠のど真ん中にオアシスがあるなんてラッキーだぜ。俺って子供のころから運が良いと思ってたけど、ここまでくると、神様に愛されてるのかもな。」

少年は町を探して北に向かっていている途中で偶然オアシスを見つけたのだった。もし、見つけていなかったら、おそらく脱水症状で死んでいただろう。

「でも、これからどうするか……
水を汲んでいこうにも、袋とか持ってねーしな。」

少年がこれからの事を考えていると、

ドゴーンッ!!!!!!!!!!

地面を大きく揺らしながら大きな音が発生した。

「な、なんだっ!?!」

さすがの少年もこの大きな揺れには驚きを隠せない。

ドゴーンッ!!!!!!!!!!

「　　　　　つ！！」

またしても大きな揺れがして

「向こうかつ！！」

少年は大きな揺れの震源地と思われる場所へ走り出した。

「皆、落ち着けつ！！！！協力して戦えばこんなやつ倒せる。だから逃げないで戦えつ！！！！」

砂漠デカミミズ討伐隊の隊長ガルバドが大声で叫んだが混乱している仲間には届いていない。実のところ、デカミミズの討伐は成功していた。しかし、その後に突如現れたデカミミズ（体長20m）の突然変異デカミミズ亜種（体長50m）の攻撃で討伐隊は壊滅に追い込まれてしまったのだ。

「がっかりだな」

そうつぶやいたのは、討伐隊で唯一混乱していないあの美少女だった。

「少しは骨のある奴がいると思ったけど……………」
「そんな奴一人もないじゃない。時間の無駄だったな」

そう言っているものの、美少女にはがっかりした様子は無かった。最初からそう予想していたかのようにだった。

「……………んっ??」

美少女は戦闘が行われている場所と少し離れた場所を一人の少年が走っているのを見つけた。

「み、見つけたっ!!」

少年はさっきの大きな揺れの原因を見つけ、手に力を込めた。

「この世界にはあんな生き物がいるのかよっ!!」

少年の顔には喜びで満ちていた。まるで、新しいおもちゃ見つけたかのような満面の笑みだった。

「あの生き物と俺、どっちが強いか確かめてやるぜっ!!」

そう少年は叫び、戦闘が行われている場所に全力で走った。

少年が走っているのを戦闘の外側で見ていた美少女はその少年の走る速さに驚いていた。

それも当然だ。なぜなら、少年は人間とは思えないほどの速さで走っていたのだから。

「ハッ！！」

少年は右手をひき、そしてデカミミズ亜種の顔面に拳を打ち出した。

次の瞬間、デカミミズ亜種の巨体が空中に浮き、そして後方に5、6回転したのだった。

「ッ　　ッ！！！！」

そこにいた討伐隊の面々その光景を見て驚きを隠せないようだった。もちろん、あの美少女も驚きに口を閉じる事が出来ていなかった。しかし、すぐに口を閉じ美少女は少年の動きを見逃さないようにじっと少年を見つめた。

当の本人はそんな事に気づかず、彼が殴り飛ばしたデカミミズ亜種の方を見て言った。

「最高……………」

最高だよ！！！！この世界には俺が殴っても壊れない存在いるなんて、最高だーっ！！！」

殴られたデカミミズ亜種は自分にダメージを食らわせた存在にいらだち、その怒りにまかせて少年へ突進した。もし、デカミミズ亜種に知能があればこんな愚かな事はしなかっただろうに……

デカミミズ亜種は朦々と砂煙を上げながら全力で突進しその進路にいた人間をごみのように踏みつぶしていった。それを見るだけで、

その突進にももの凄い力が加わっていることが分かる。しかし、少年はそれを見てもまったく避けようとしな。怯えて避けようにも動けないのか、それともこの程度の突進は避ける必要もないのか。少年の場合は後者だった。

「その程度で全力か？？」
遅いな……………」

少年はそう言いながら右手を前に突き出した。
そして、少年はその右手でデカミミズ亜種の突進を受け止めた。
その顔には苦痛という表情はなく、そこにあるのは巨体を受け止めることができた喜びだった。

「どうやら、この世界では俺の力が格段に引き上げられている様だな。」

少年はそう言いながら、敵を掴んでいる右手に力をいれて敵を真上に思いっきり投げ飛ばした。それと同時に彼の足にも力を入れて、敵の真上まで飛び、片足を頭上まで上げそして、敵の脳天に打ち下ろした。

ドゴーンッ！！！！

大きなクレーターを作り、デカミミズ亜種は地面に突き刺さった

……

そして、少年は地面に着地し、デカミミズ亜種の近くまで歩き、デカミミズ亜種の絶命を確認した。

第3話 出会い

「フフッ」

少年は笑っていた。それは、自分よりも何10倍もの体をもつ生き物と、命の取り合いをしたからだ。

少年は命の取り合いをすることがとても楽しい事だと思った。

じゃりっ

砂の上を歩く音がした。

「あんだ強いんだね」

あの美少女が少年に話しかけた。

「んっ??」

少年は生き物を殺して、悦に浸っていたがその呼びかけで、自分の目の前に人がいることに気がついた。

「……おまえ誰だ」

少年は興味無さそうに言葉を紡いだ。

「私はフィオ・プリンシア
フィオと呼んでっ」

美少女は少年とは反対に笑顔で言った。

「……神武佑一」

やはり少年はめんどくさそうに言った。

「ジム・ユーイチ……変わった名前ね

それで、単刀直入に言うけど私とパーティ組まない??」

「……何のパーティだ」

ユーイチは少し首を傾けて問い返した。

「パーティといったらギルドの

パーティでしょっ」

フィオの返答に対してまともやユーイチは首をかしげた。そして、
フィオに自分の置かれた状況を話すか考え、

「……俺はこの国に来たばかりでこの国についてよく知らないんだ」

ユーイチは異世界から来た事は隠すことにした。

「だから、この国について色々教えて欲しいんだけどギルドとかパーティとか……」

ユーイチはフィオから情報を手に入れることにした。

「わかったわ。この国について教えてあげる。そのかわりこれを聞いたら、私とパーティ組むと約束してね。じゃないと教えてあげない」

ユーイチは少し考え

「わかった。」

ピカツ！

「んっ！？」

ユーイチはフィオのポケットが一瞬光ったように見えたが気のせいだと解釈した。

「うん、なら説明するね」

そう言ったフィオの口元が笑っていた事にユーイチは気づかなかった。

「まず、ギルドについて説明するね。ギルドとは、魔物討伐や採集、人探しなどの依頼を取り扱っている組織で、その依頼を解決するのが私のような冒険者。冒険者の中には一人で依頼をこなす人もいるけど、ほとんどがパーティを組んで複数人で依頼をこなすのが普通かな。あと、冒険者にはランク（G、F、E、D、C、B、A、S、SS）が存在してそのランクがその人の社会への貢献度、強さを表しているんだ。」

次に、この国について説明するね。この国はローリエ王国といって周りをたくさんのに囲まれているんだ。そのせいで、他国からの侵略の危険が高いけど、そのかわりに他国からの技術者の亡命が多いんだ。それは、この国が資源に富んでいるからね。そのおかげでこの国は技術水準が高くてね、侵略の脅威から国を守る事が出来ているんだ。」

「……なるほど」

ありがとう、フィオ。よくわかったよ。」

ユーイチは説明を聞いてフィオに感謝の言葉を言った。
(本当に感謝しているかはわからないが……)

「どういたしまして。ユーイチわかってるよね?。」

フィオは笑顔で言った。

「約束だからな……」

ユーイチはやはりめんどくさげに言った。

「よかった」

フィオは笑顔で飛び跳ね、いぢわるな笑顔を浮かべながら

「この魔法具使うことにならなくて。」

とポケットから鎖のようなものを出しながら言った。

「魔法、具??。」

ユーイチは聞きなれぬ単語が出てフィオに問い返した。さっきまでの態度とは一変して、その言葉には感情がこもっているように聞こえた。

「もしかして魔法具についても説明した方がいい??。」

「出来れば魔法についても教えて欲しい」

ユーイチは魔法具という単語から魔法がこの世界に存在すると考え魔法について聞くことにした。

「魔法とは 自らの力で自然の力や世の理を変える力の事。魔法は、自らが持つ個体魔力または大気に含まれる天然魔力を使って魔法陣を描くことで使う事が出来る。他にもいくつか発動の仕方はあるけど
今回はとばすね。」

次に、魔法具とは あらかじめ道具に魔法陣を刻み込んでおき、魔力を加えるだけで簡単に発動できるようにしたものだよ。」

ユーイチはその説明を真剣に聞き、先ほどの光が魔力であったと推測した。

「なるほど。じゃあ、その魔法具にはどんな効果があったんだ？」

「ん」。これは、約束の鎖プロメスと言う魔法具で約束という意味があるだ。で、約束を違えたものには、それ相応の報いを与えるという効果があるんだ。」

フィオは笑いながら言った。

「報い、ね……」

「そんなことより、はやく近くの町に行かない??
こんな暑いところに長居したくないし」

フィオはそう言って

「デア・フリーグ
飛翔の風」

ユーイチの手を掴んで飛翔魔法を発動した。
ユーイチはただただ苦笑するだけだった。

第3話 出会い（後書き）

デア・フルーグ
飛翔の風

効果：対象を風で包み込み空を縦横無尽に移動できる魔法

第4話 初めての都

フィオとユーイチは二人が出会った砂漠、バラーン砂漠の北端に位置するハナプトラという都市にやって来ていた。

「ん〜、涼し〜。」

フィオは手を上に伸ばしながら言った。

「確かに、砂漠の中にある都市とは思えない涼しさだな。魔法で涼しくしているのか??」

ユーイチはあたりを見渡しながら質問した。

「魔法なんて使ってないよ。この都市の中心にオアシスがあるおかげで涼しくなってるんだよ。詳しい理由は知らないけど。」

「クールアイランドか。」

「クールアイランド?? 何それ??。」

「地下水が地表面からの蒸発、植物からの蒸散によって大気に放出され

まわりの気温を下げる現象。それが、オアシス周辺では同心円状に広がり

島のような形の涼しい地域が現れることから、そう呼ばれている。

「

「ユーイチって物知りねっ」

フィオは手を胸の前に手を合わせ可愛い顔をしながらユーイチにウィンクをした。

「これからどうするんだ」

ユーイチはフィオの行動には興味が無いのか無視して言った。

「む。何か言ってくれてもいいのに。特に可愛いとか可愛いとか……」

フィオは口を膨らませながら言った。

「……………」

ユーイチはフィオをじっと見つめた。が、その目には感情がこもっていないかった……

「そんな目で見られると辛いんだけど……
まあ、それは置いて、ギルドに行ってユーイチの冒険者登録の手続きをしにいくよ」

コクッ

ユーイチは頷いた。

第4話 初めての都（後書き）

B プロセス ランク約束の鎖

効果：2人の間に約束事を決め、それを破った方には災いをもたらす。災いは約束事の重要度によって危険度が変化する。

第5話 ギルド

カランカラ〜ン

フィオとユーイチはドアを開け、ギルドの建物に入った。中にいた冒険者と思われる人々は2人を見て、すぐに自分たちの会話に戻った。

ユーイチたちは自分たちに向けられた視線を気にせず、受付番をしている男性に話しかけた。

「冒険者になりたいんだけど」

ユーイチがそう言うと周囲から笑い声こらえる音が聞こえた。

「あんなガキが冒険者だってよ。笑わせるぜっ。ガキは母ちゃんの乳でも飲んで家で寝んねしとけてな。」

ハハハッ!!!

その言葉に周囲にいたやつらも笑いだした。

「何なのあいつらっ!!!」

確かにユーイチは背が低いけど…

ユーイチも黙ってないで何か言いなさいよっ!!!」

フィオは男たちの言葉に苛立ちを隠せていなかった。

そんなフィオとは対照的にユーイチは黙々と受付番の話を聞いていた。

「ねえつてばっ!!」

ユーイチはフィオの言葉に面倒くさそうに返事をした。

「フィオ、人の言葉なんていちいち気にすることないぞ。
所詮は力がない奴のひがみなんだから。」

ユーイチの言葉にさすがのフィオも絶句し、さっきまで大声で笑っていた冒険者たちは怒りを隠せなかった。

ドンッ!!!

「このガキ……
調子に乗ってんじゃねえっ!!!」

最初にユーイチをバカにした冒険者が近くにあった机を叩きながら言った。

「……………」

ユーイチは冒険者の言葉を見殺しして受付番の方に振り返った。

「このガキがつ!!!」

冒険者はユーイチの態度に我慢できず腕を大きく引きユーイチの顔面に拳を打ち出した。

次の瞬間、ユーイチ達の目の前から冒険者の姿が消えた

ズドンッ!!!

冒険者の体が壁に突き刺さっていた。周囲にいた冒険者たちは今何が起こったかわからず、しばらく茫然としていたが、仲間がやられた事に気づき、ユーイチに襲いかかった。だが、1分も経たないうちにユーイチに襲いかかった冒険者は気絶させられてしまった。

パンツパンツ!!

手を軽くたたき、もう自分を襲おうとする人ものがいらないことを確認した。

「あんた強いんだね」

受付番が感心したように言った。

「ただこの人達こゝみたちが弱かったただだよ。」

ユーイチは興味なさげに言った。
その姿を見た受付番は苦笑した。

「で、説明はもう良いから冒険証の発行をしてくれ」

「わかりました。では、この書類を記入してください。」

そう言って書類をユーイチに渡した。

「……………」

ユーイチはしばらく手に持った書類を見て、そしてフィオの方に振り返って言った。

「文字が読めない……」

「……………ヘッ!？」

フィオは予想外の質問に思わず変な声を出してしまった。

「い、今なんて言った?？」

フィオは今聞いた言葉が聞き間違えかもしれないと思いユーイチに聞き返した。

「文字が読めない……」

ユーイチの顔には少し恥ずかしさが浮かんでいるように見えた。

「本当に……??」

「この国に来たばかりだから」

ユーイチはうなずきながら言った。

「そういえばそうだったね」

フィオはユーイチの顔を見て笑いを堪えているようだった。

「……………」

ユーイチはフィオの顔を睨めつけた。

「ごめんごめんっ。」

その紙貸して。」

そう言いながらフィオはユーイチから書類を受け取り

「私が代筆してもいい??」

と受付番に聞いた。

「かまいませんよ。ただし、こちらにはご本人の拇印をお願いします。」

「わかった」

フィオはすらすらと書類を記入して

「ユーイチ。ここに拇印して」

ユーイチはうなずきながら、朱肉に親指をつけて、書類に判を押した。

「ジムム・ユーイチ様でよろしいですか？」

「ああ」

「確認いたしました。では、こちらが冒険証になります。依頼を受けるときは、この冒険証が必要になりますので必ずお持ちください。失くした場合は、再発行に銀貨10枚必要となりますのでご注意ください。」

「わかった」

こうして、ユーイチは冒険者になった。

第6話 武器屋

「依頼を受けなくてよかったの」

フィオは歩きながら尋ねた。

「やっぱり、依頼を受ける前に武器を買っておきたいからな」

フィオはてつきりユーイチが素手で戦うものだと思っていたのでこの発言に少し驚いた。そうすると、ある疑問がフィオの頭に浮かんだので、それをユーイチにぶつけることにした。

「ユーイチってどんな武器使うの？」

「やっぱり剣かな。生き物を切り殺してみたいし。」

ユーイチは少し微笑みながら答えた。

フィオは少し顔を引きつらせたが、ユーイチはそんなことは気にせず

「武器屋ってどこにあるの??」

と尋ねた。

「向こうの区画にあったと思うけど……」

「じゃあ、はやく行こうぜっ」

そう言つとユーイチはフィオの手を掴んで、武器屋へと走り出した。

「うゝむ。どれにするか。」

「悩んでるんだったら、軽く振ってみたら。それで、じっくりきたものを買えばいいんじゃない。」

「良いでしょ。店長さん。」

「ああ、いいとも。ただし、周りには気をつけてくれよ。」

「だつてさ」

ユーイチはその言葉を聞くと手に持っていた剣を試しに振ってみた。

剣のスピードはもの凄く速かった。フィオでさえ、ユーイチの太刀筋がかるうじて見えているだけで、周囲にいる人にはまったく見えていなかった。

「うん。これはいい。おっちゃんこれくれ。」

ユーイチはあんなに速く剣を振り回していたのにまったく息を切らしていなかった。本当に剣を振っていたのか疑問を覚えてしまいそうだった。

「え、ああ金貨3枚でございます」

「だつてさフィオ」

「へっ!？」

「俺お金持ってないし」

フィオは呆れて口を閉じるのを忘れてしまいそうだった。

「お、お金持ってないって、それでよく剣を買おうという気になったね……」

そう言いながらもフィオは剣の代金を払っていた。

（まあ、どうせユーイチが依頼をこなせばたくさんお金も入ってくると思うし。これは投資金って事で）

こうして、ユーイチ達は武器を買って店を後にした。

第7話 宿屋

武器屋を出た2人は宿屋を探して歩いていた。

「どうしてもいっぱいなよっ!!」

フィオはいらだちを隠せていないようだった。それも当然だった。2人は武器屋を出てから宿屋を10軒以上回ったのだがどこもいっぱいで泊まる事が出来なかったからだ。

「俺は野宿でも良いぞ。」

そう言ったユーイチはどこか楽しそうだった。

(命の危険のある世界で野宿っておもしろそうだな……)

ユーイチはのんきに考えていたが、フィオはそうではないようだった。

「私は絶対に嫌よっ。」

お昼に砂漠に行ったせいで汗をもの凄くかいたし、砂が体にくっついて

もの凄く気持ち悪いっ!!

こんな状態で寝たくない。てか、お風呂入りたいー!!」

フィオは周りの目を気にせず大声で叫んだ。

「だが、宿屋が見つからないんだからしょうがないだろ。」

ユーイチは周りの目は気にせずそう答えた。

「……んっ!？」

ユーイチは通りの端にとあるものを見つけた。

「どうしたの……?」

フィオはユーイチを睨みつけながら言った。

「これ……」

宿屋の……看板??……じゃないのか？」

ユーイチはそれを自信なさげに指して言った。ユーイチが戸惑うのも当然だ。なぜなら、その看板の文字がかすれていてよく読めないのだ。さらに、その看板がかかっている建物はもの凄く古く、地震が起これば真っ先に崩れそうだったのだから。

「とにかく入ろうか。」

ユーイチはフィオの手を掴んでその建物の中に入った。

「すいません。誰かいますか。」
「はい。」

ユーイチが尋ねると奥の部屋から女性が出てきた。

「どなたですか??」

「僕達は旅人で宿屋を探していたのですが、ここいらにある宿屋がいつぱいで途方に暮れていたら、偶然外の看板を見たんですが……ここは宿屋であってますか??」

ユーイチがそう尋ねると女性の顔がみるみるうちに笑顔へと変わり

「はい、そうですっ!!」

と手を胸の前に合わせて喜んだ。

「お風呂」

その場にそぐなわない言葉が紡がれ、2人は言葉を発した人物の方を見た。

「お風呂はあるの?」

その言葉を発したフィオは女性の方を睨みつけながら言った。

「は、はいっ。ありますっ。」

睨みつけた女性は背筋をピンと伸ばして返事をした。

「……………」

フィオはじつと睨みつけた。

「お、お風呂はその通路の先にありま……………」

女性の言葉を最後まで聞かずお風呂へとダッシュした。

「……………」

2人はフィオの姿を見つめ、固まっていた。

「夕飯はどうするんだい？」

フィオが入った通路とは逆側の通路から男が突然現れてユーイチに尋ねた。

「えっ……………」

ああ、ここで食べれるな食べたいんだが。」

「わかった。」

返事を聞いた男性はそのまま奥に戻った。

「誰……………」

「驚かせてすいません。私のお父さんです。」

ユーイチがボソツと言った言葉に女性は律義に答えた。

「……………」

ユーイチは元々自ら話題を提供する性格ではないし、女性もフィオとは違って人と話すのが得意そうではなかった。そんな2人の間に会話が生まれるはずもなく無言の状態がしばらく続き

「部屋に案内しますね。」

と女性はユーイチを部屋まで案内した。

「こちらが部屋になります。」

「おお、きれいだ……」

ユーイチは部屋の中を見て言った。ちりが落ちていなくて、壁にも染みと言った類がなく、建物の外装とは正反対だった。

「この部屋はあんたが掃除していたのか??」

「はい。」

女性は自信満々に言った。どうやら、女性は掃除にはある種の自信があるようだった。

ユーイチはその様子を見て感心したようだった。

「あんた、名前は??」

「へっ……」

あっ！アレシアです。」

「アレシア、アレシア……」

ユーイチは口の中でアレシアの名前を繰り返した。

「アレシア。部屋まで案内してくれてありがとう。」

ユーイチは微笑を浮かべながら言った。

「はっ、はい。どうぞごゆっくりしてってください。」

アレシアは頬を赤く染めながら部屋を出て行った。

「ふう。」

ユーイチは傍にあつたベッドに腰掛けた。

「さすがに疲れたなあ。

俺も風呂に入るか。」

ユーイチは風呂場に向かった。

ユーイチはフィオよりも遅くお風呂に入ったにもかかわらずフィオより先にお風呂を後にした。

（フィオはまだ入っているのか）

ユーイチはフィオが出てくるまで剣の手入れをすることにした。

しばらくするとフィオが出てきて、

「へー。ユーイチって剣の手入れ出来るんだ。」

フィオはユーイチの後ろからユーイチの肩にあごをのせながら言
った。

「ああ。」

ユーイチはそれが当然だという態度をしていた。

コンッコンッ

ドアをたたく音がした。

「はい。」

フィオは返事をしながらドアを開けた。
そこには、アレシアが立っていた。

「お食事の用意が出来たので呼びに来ました。」
「わかった。案内してくれ、アレシア。」

ユーイチがそう言うとアレシアは頬を赤く染めて2人の前を歩きたした。

「ユーイチ。アレシアって??」
「彼女の名前だ。」

ユーイチがそう言うとフィオは有り得ないものを見たという顔をした。

「どうしたんだ?」

さすがのユーイチもフィオの態度に不快なものを感じていた。

「いや。ユーイチが人の名前を覚えるのが意外で。」

フィオは苦笑しながら言った。

「そうか?」

「うん。昼の出来事を見た後だとね……
弱い人間には興味が無いのかと思ってた。」

フィオは自分が思っていた事を正直に言った。

「フィオ。おまえは馬鹿か。」

彼女は冒険者じゃないんだぞ……」

ユーチは憐みの目でフィオを見つめた。

「そ、そうね……」

ユーチにそんな事を言われてフィオは軽いショックを受けていた。だが、そのショックも次にユーチが言った言葉でどこかに飛んでしまった。

「それに彼女は素晴らしい才能を持っている。」

「才能??」

「ああ。フィオはこの宿屋の事をどう考えた?」

ユーチはフィオをじっと見つめて言った。

「え」と……

建物の外装ひどいものだったけど、中はもの凄く綺麗だった。風呂場もカビなんてなくて部屋もベットや椅子とかはどこにでもあるようなものだったのに、どっかの高級宿屋みたいな感じだった。」

「そうだな。俺もそう思った。」

彼女は掃除の才能や物をそれが本来持っている以上の魅力を引き立てる才能を持っている。これは素晴らしいことだ。」

ユーイチは頷きながら言った。彼女に感心しているようだった。

「だから、彼女には名前を覚えてもらえる資格がある。」

フィオはユーイチの言葉に啞然した。

「し、資格??」

「ああ。」

ユーイチはそれが当然だという態度を示すためにはつきりと頷いた。

「つまり、才能が無い人の名前は覚えるつもりがないと??」

「何を当然なことを聞くんだ。フィオ。」

（ユーイチの性格ってやっぱり最悪だ……）

こうして、ユーイチはこの世界に来て初めての夜を過ごしたのだ。
った。

第8話 朝の光景

「この宿屋の朝食美味しかったね。」

フィオは満足そうに言った。ユーイチ達は今、部屋で朝食後の休息をとっていた。ユーイチはやくギルドに行こうとしたのだが、フィオが休憩したからがいいと駄々をこねたのでユーイチは渋々フィオと一緒に休息していた。

「確かに美味しかった。しかし、アレシアに料理の才能があったなんて驚きだ。」

ユーイチの彼女に対する評価が上がったのが見てとれる。

「でも、あんなに凄い能力があるのに、どうして、ここはこんなに空いてるのかな。もっと、繁盛していても良いと思うのに……」

フィオは素朴な疑問を持った。

「やっぱり、建物の外装が原因だな。」

「外装??」

「忘れたのか。あんなにひどかったのに。」

フィオはしばらく頭を抱えて考えたが

「ここに来た時はお風呂の事で頭がいっぱいだったんだよ。」

フィオはそう言い繕った。

「これは……ひどいね。」

2人は外に出て建物の外装を見て言った。

「魔法でどうにかできないのか？」

「まあ、出来ない事は無いけど」

2人が外で会話していると

「ユーイチさん達はどこかおでかけするのですか??」

と、アレシアがドアを開けて尋ねた。

「今日はギルドに行って依頼を受けるつもりだよ。」

「ギルドって……」

お2人は冒険者さんだったんですか!？」

「そうだよ。」

アレシアはフィオの言葉に驚いた。

「驚きました。お2人の雰囲気はどこか凄い感じがしていたのですが、それはお2人が冒険者だったからなのですね。」

アレシアはそう勝手に解釈した。

「では、お昼食はいらないのですね？」

「ああ、今日は外で食べるつもりだ。」

ユーイチがそう言うのとアレシアは頬を赤く染めた。

（むむむつ。もしかして、アレシアってユーイチに脈ありッ！？
って、何を焦ってるの私は。そもそもわたしには関係の無いこと
じゃない）

「どうした、フィオ？変だぞ。」

「へ、へ、変じゃないぞっ。」

フィオは焦りながら返事をしたが、ユーイチは気にも留めず

「じゃあ、アレシア。俺たちはもう行くから。夕飯は宿で食べる
からな。」

「はい、わかりました。いつてらっしゃいませ。」

アレシアの頬は赤く染まっていた。

（落ち着けっ。落ち着くのよ私。）

フィオはまだもんもんしていた。

（そういえば、アレシアに外装の事言うの忘れてたな。まあ、宿
に戻ったら言えば良いか。それにしても、さっきのフィオはちよつ
と変だったな、どうしたのか？？まあ、深く考えてもしょうがない
か。）

ユーイチはギルドに向かう途中、こんな事を考えていた。

第9話 砂漠の王（前書き）

ここでは、異世界に刺激を求める者の世界での通貨事情について書かせていただきます。

「銅貨…日本円で言う1円

銀貨…日本円で言う100円

金貨…日本円で言う10000円」

第9話 砂漠の王

ユーイチとフィオは砂漠を歩いていた。

「それにしても、本当に暑いわね。」

フィオは額の汗を拭いながら言った。

「それにしても、ユーイチ。なんで、あんたは汗を全くかいてないの？」

フィオはユーイチを見て不思議に思った。当然だ。ユーイチは汗を全くかいておらず涼しげな顔をしているからだ。

「体がこの暑さに慣れたからな。」

「慣れたからって……」

（ユーイチって普通の人間と違うと思ってたけど本当に人間なのかな？）

フィオがそんな事を考えていると

「キャッー!!」

フィオは突然ユーイチに蹴飛ばされ地面へと倒れ込んだ。

「何するのよっ!!」

フィオがそう怒鳴った次の瞬間、フィオがいた場所に砂が凄い勢

いで飛んできた。もし当たっていたら体が真つ二つになっていたかもしれない。

「なっ!？」

フィオは驚きを隠せなかった。

「どうやら、獲物が現れたらしい。」

ユーイチは笑みを浮かべながら言った。

時間は少し遡る

カランカラン

ユーイチ達がギルドの建物に入ると、中にいた冒険者たちが2人を見たがすぐに目を背けた。冒険者たちの顔には恐怖の色があった。先日の出来事を思い出したらしい。

そんなことは気にせずユーイチは受付番のところに行った。受付番は昨日の男とは違うようだった。

「依頼を受けたいのだが何がある？」

ユーイチが尋ねると受付番は、今このギルドにどんな依頼がある

かをユーイチ達に述べた。

「なるほど……」

じゃあ、これをやるとしよう。」

と、ユーイチが決めた依頼は

「危険度D + 砂漠^{イクトウス}の魚の討伐」

- 内容 -

最近、砂漠の中を縦横無人にかけているモンスターがいる。そのモンスターは砂漠の中をまるで水の中を泳ぐかのように移動していて、砂漠を横断しようとする商人たちを襲っている。そのせいで、商人たちが怯えて砂漠を横断しなくなった。このままでは、砂漠の中に位置する町で食糧や水などが不足して非常にまずい状況に陥ってしまうかもしれない。そうなる前に、このモンスターを退治してくれ。モンスターの特徴は背びれが赤いということだ。

- 報酬 -

金貨20枚と魔法具理^{クエスト}の番人

- 依頼主 -

商人連盟ブンドス

「そ、それをうけるのですか？」

受付番は驚いていた。当然だ。ユーイチはGランクの冒険者、なのに、D＋ランクの依頼を受けると言ったのだから。もし、彼が昨日の出来事をその目で見ていたら驚かなかっただろう。

「悪いか。」

「い、いえつ。そんなことは……」

ユーイチ様の砂漠イクトウスの魚の討伐依頼の受領を確認しました。」

それを聞いたユーイチは振り返って

「フィオ行くぞ。」

歩きだした。

（危険度D＋の依頼の報酬に魔法具もつけるなんて……
何かうらがあるかもしれない。気をつけなくちゃ。）

そして、フィオはユーイチの後を追った。

受付番は笑みを浮かべていた。

ザアアアーーーー

「砂漠を水の中のように移動するってのは本当だったみたいだな。」

ユーイチは嬉しそうに言ったが、フィオの顔は優れていなかった。

「どうかしたのか？」

「やっぱり、何か変……」

フィオは砂漠の中を泳いでいるモンスターをじっと見ていた。

「何がおかしいんだ？」

ユーイチがそう尋ねると

「砂漠イクトウスの魚は体長30mの生き物で砂の中に体を隠しながら移動するの。それは、皮膚が紫外線に弱いからなの。なのにあの砂漠イクトウスの魚は体の一部を出しながら泳いでる……」

とフィオは答えた。

「本当に砂漠イクトウスの魚なのかな……」

「だが、依頼書に書かれていた外見と一致してるぞ。まあ、俺は、剣でモンスターを切れるなら文句ない。」

ユーイチはそう言いながら剣を抜いて構えた。

「行くぜっ！！」

ユーイチは全速力で砂漠の魚走って行き、

びゃっこちれっけき
「白虎地裂撃っ！！」

ユーイチは腕に力を込めて剣先を地面をたたきつけた。数瞬後、
イクトウス
すさまじい衝撃波が発生し、砂漠の魚に襲いかかった。

「ガアアアーーーー！！！！」

衝撃波が砂漠の魚に直撃し、砂煙が砂漠の魚の姿を隠した。
イクトウス

ヒュウウウ~~~~

砂漠に風が吹き、砂煙を払い砂漠の魚の姿を露わにした。多少の
イクトウス
切り傷があるが重傷を負った様子はない。

「うそでしょ。あれは砂漠の魚なんかじゃないっ！！」
イクトウス

あ、あれは……
バレーナ・レアーレ
砂漠の王よっ！！」

フィオはモンスターを見て言った。

バレーナ・レアーレ
「砂漠の王??」
バレーナ・レアーレ
「ええ。砂漠の王……」

砂漠に生息するモンスターの中でも上位に位置する奴よ。」

フィオの顔には余裕が消えていた。

「どのくらいの強さなんだ。」

「危険度B - よ。」

それを聞いたユーイチは笑みを浮かべた。

「????」

フィオはそれを見て眉をひそめた。

「どうして笑ってるの??」

「だって、楽しいだろ。こんな依頼余裕だと思って来てみたらこんなトラブルが起こったんだから。」

(そう言えばユーイチはこういう奴だっけ)

フィオは苦笑しながら思った。

「で、どうする？」

今ならまだ逃げられるけど。」

(こんなこと聞くまでもないか)

「まさか……」

戦うに決まってるだろっ!!!!!!

フィオはおれの援護を頼むぜっ」

ユーイチは手に力を入れて砂漠の王に立ち向かった。
バレーナ・レアーレ

「ふふつ。」

私もここいらでユーイチに見せますか。私の実力を。」

そう言ったフィオの手には木の杖があつた。

「うおおおー」

コーイチは砂漠の王の背中に剣を振りおろした。

「ガアアア——」

砂漠の王は咆哮をあげながら尾を使ってユーイチを打ち払った。

ブンッ！！！！

「クッ!!!」

ドンッ！！！！
ザアアアア――――

ユーイチは咄嗟に剣で攻撃を使ってダメージを受け流したが、剣先はボロボロになってしまった。

「これじゃ、もう切れねえな。」

ユーイチは剣を捨て、構えた。素手で戦うつもりのようなうだ。

「んっ？？」

ユーイチは敵の方を見るとそこにはさつきまでいたはずの砂漠の

王がいなかった。

「どこだ。」

ユーイチはあたりを見渡したがどこにもいなかった。

（まさか、地面の中か？）

「ユーイチ。上よっ！！」

フィオが空を指しながら、大声で言った。

「何っ！！！！」

ユーイチは空を見て驚愕した。バレーナ・レアーレ砂漠の王が空を飛んでいたのだ。いや、実際には飛んでいなかった。あまりにも、高いところまで飛び跳ねていたので飛んでいるように見えたのだ。

「ガアアアアアーーーー！！」

バレーナ・レアーレ砂漠の王は咆哮をあげながらユーイチの所に落下した。

「ま、まずいつ」

さすがのユーイチも焦り避けようとするが、

「「ガウ」」

ドゥウ・ロース王の奴隷がユーイチの足に噛みついた。

「クッ！」

この一瞬の遅れが命取りになった。

（避けきれない……）

ユーイチは両手を空にかかげた。バレーナ・レアーレ砂漠の王を受け止めることにした。

こんな状況でもユーイチは笑っていた。

（面白い……）

「ガアアアアーーーー」

「ウオオオオオーーーー」

一人と一匹は雄たけびをあげて向かい合った。

「ウインドシア空への道筋」

その瞬間強い風が発生し、バレーナ・レアーレ砂漠の王を受け止めた。その光景をユーイチは茫然と見ていた。

「どう、ユーイチ。私も結構やるでしょ。」

その風を発生させた本人が笑いながら言った。

「フイオ……」

スゲェー。魔法ってこんなこともできるのか。」

ユーイチの目はしっかりとフィオを捉えていた。ユーイチがフィオの事をしっかりと見るのは初めての事かもしれない。才能のある人間にしか興味を持たないユーイチはフィオがそれなりの才能を持っている事はわかっていたが、その才能をじかに見た事が無かったので、そこまで興味を持つ事が出来ていなかったのだ。

（やっと、ユーイチが私を見てくれた。）

その事はフィオも気づいていたので喜びを隠せなかった。

（せっかくだし。もっと頑張るか）

フィオが杖を上にかかけると砂漠の王も空高く飛んでいき、フィオが魔法を解くと砂漠の王が落下した。

「くらえっ！！」
マエストラ
「精霊の暴風」

ヒュンツ！！ ヒュヒュヒュンツ！！

砂漠の王の落下先にかまいたたちが発生し砂漠の王を切り裂いた。

「ギガアアアアアアーーーーー」

砂漠の王は体を細切れにされ、苦痛の声をあげてた。だが、それもすぐに止んだ。砂漠の王が頭と赤い背びれを残して絶命したのだ。砂漠の王の血が砂漠を赤く染めあげた。

第9話 砂漠の王（後書き）

ウインドシア
空への道筋

効果：強力な上昇気流を発生させる魔法。この上昇気流に巻き込まれれば大抵の生き物は風に耐えられず絶命する。

マエストラール
精霊の暴風

効果：強力な暴風を発生させその内部からかまいたちを放つ魔法。かまいたちを放てば放つほど暴風の規模は小さくなる。

第10話 襲撃者

フィオは砂漠バレーナ・レアーレの王の頭部と背びれを袋に詰めていた。これは、依頼をこなしたという証拠を示すためである。

「驚いたな。おまえがあんなに強いなんて。」

砂漠バレーナ・レアーレの王の血がかかり、服が赤色に染まっていたユーイチがフィオに話しかけた。

「ありがとう。」

フィオの顔が少し赤くなった。

「今度手合わせしないか。」

「いやよ、ユーイチみたいな化け物戦うなんて、命がいくつあっても足りないもの。」

「残念だ……」

ユーイチの顔が一瞬、がっかりしたように見えたが、すぐに真剣な顔になった。

「どうしたの？」

その表情を見て、フィオは今行っている作業を中断してユーイチと向かい合った。

「さっきは助けてくれてありがとう……」

恥ずかしいのかユーイチはそっぽを向いてしまった。

「えっ!？」

あ、ああ。そんな、仲間なんだから当然の事をしたまだよ。」

お礼を言われて恥ずかしいのか、フィオは中断していた作業を再開した。

二人の間には何とも言えない空気が流れ、フィオはその空気に耐え切れず

「それにしても、あのギルド私たちをはめるなんて許せない。」

その空気を払しょくするためにフィオはは思っていた事を言った。

「ギルドの受付番、この事を知ってたに決まってる。」

「どうして、そう思うんだ？」

「え」と……

あれよ、ユーイチが昨日倒したやつらと手を組んで仕返しをしようと考えていたのよ。うん、そうに決まってる。」

フィオは首を縦に振ってウンウンと頷いた。

「それは違うと思うぞ。」

すぐに、ユーイチは否定した。

「ど、どうして…?」

「仕組んだにしては行動がはやすぎる。あんな奴らこみたちが一日で出来るはずが無い。もっと昔から仕組まれていたと思うんだが……」

とにかく都に戻ろう。」

「そうね。」

2人はとにかく都に戻る事にした。

カランカラン

「なっ!？」

受付番はドアの先にいる人物を見て驚愕した。

「そんなに驚いてどうしたの??」

フィオは受付番を見ながら言った。その顔には、笑みが浮かんで
いるが目が笑っていない。

「い、いや、何でもない……」

そんなことより、どうしてここにいるんだい??」

受付番の顔は引きつっていた。

「もちろん、依頼をこなしてきたのよ。」

そう言って、袋の中から赤い背びれと顔を取りだして受付番に見

せつけた。

「なっ！！」

「どうしたの??」

「い、いえ……」

確認させていただきますね。」

受付番はそう言ってフィオから顔を受け取りじっくりと見て

「本物のようですね……」

顔を青くしていた。

「では、報酬として金貨20枚、魔法具理^{クストス}の番人を受け取りください。」

受付番から報酬を受けとったフィオは受付番に何か言おうとしたが、後ろにいたユーイチに引っ張られ何も言わずにギルドを後にした。受付番はその姿を敵を見るような眼で見つめていた。

「なにするのよっ！！」

フィオはユーイチに文句を言った。あの場であの受付番を問い詰めようとしていたのに、それを邪魔されて苛立っているようだ。

「あの場で何か言っても適当な言い訳を言われてあしらわれてたよ。」

「それは、そうかもしれないけど……」

「まあ、今は適当に時間をつぶそう。相手が動くまで……」

「どういう事??」

「……」

日が暮れ始め、人影がなくなった頃。

「アレシアに遅くなるって言っとけばよかったな。」

ユーイチがそう言うがフィオは返事をしなかった。通りの端で頬を膨らませてすねていた。この時間帯になるまで2人が時間を潰している間、何度も理由を聞いてもユーイチが答えてくれなかったからだ。

「教えてくれてもいいのに……」

その様子を見ていたユーイチは

（教えてあげればよかったか。だが、俺が考えている事が正しいとも限らないし）

ユーイチがそう考えていると、通りに武器を持った人間が現れ、突如ユーイチ達に襲いかかった。が、そんな攻撃ユーイチ達からすれば子供の攻撃と変わらないわけで、襲撃者は簡単に捕まった。

「なんなのこいつ??」

「ギルドの受付番だ。」

ユーイチはそう言つて襲撃者が被っている仮面をとった。その仮面の下にはユーイチが言つた通りギルドの受付番の顔があつた。

「う、嘘っ!!」

どうしてわかつたの。ユーイチ。」

「フィオ、^{バレーナ・レアーレ}砂漠の王の頭と背びれをこいつに渡したのはどうしてだ。」

「それは、私たちが ^{バレーナ・レアーレ}砂漠の王を倒した証拠を示すためだ。」

「そうだな。だが、俺たちが受けた依頼は背びれの赤い砂漠の魚^{イクトウス}であつて砂漠の王ではない。なのに、こいつは砂漠の王の顔を見て俺たちに報酬を渡した。だから、こいつには何かある思つたんだ。だが、あの場で問い詰めても意味がないと思つたからこいつが動き出すのを待っていたんだ。そうしたら、案の定襲われたつてわけだ。」

ユーイチがそう言つとフィオは納得がいったようだ。

「でも、そうだったなら教えてくれてもいいじゃない……」

「俺も半信半疑だったからな。」

まあ、今はこいつから詳しい理由を聞こうか。」

ユーイチは意地悪な笑みを浮かべて、襲撃者を見た。

「答えてくれるよな?？」

「……………ガッ!!」

襲撃者が黙つたのでユーイチは腹を殴つた。

「答えてくれるよな。」

ユーイチの顔には感情が無かった。

「……………」

それでも襲撃者は黙っているのでユーイチが殴ろうとすると

「そこまでだっ！！！」

ユーイチ達の後方に人間の集団が現れた。

（こいつの仲間！？）

フィオはその集団を見てそう思った。

「何者だ？？」

ユーイチが尋ねるとその集団の隊長格の人間が前に出て答えた。

「我はローリエ王国直属部隊副隊長ファルコン。」

「ちよっ、直属部隊っ！？」

どうして直属部隊がここに？？」

ファルコンの言葉を聞いたフィオは顔を青くした。

「その男を引き渡してもらおう。」

「嫌と言ったら、どうする？？」

2人の間の気温が急激に下がった感じがした。

（こいつ強いな）

ユーイチが笑みを浮かべ構えをとった。

その姿を見たファルコンは拒絶と判断し戦闘態勢に入る。

「なっ!？」

ユーイチ、何考えてるの!!」

「別に、俺はただこいつと戦いたいだけだ。」

このままでは本当に戦闘へと発展してしまうと思ったフィオはギルドの受付番だった男の首根を掴みファルコンの方へ投げた。

「私たちは戦うつつもりはないわ。ユーイチも手をひきなさい。」

「なんで俺がフィオの「いいから引・き・な・さ・い」

ユーイチはフィオの剣幕に押され戦闘態勢を解いた。それを見たファルコンも戦闘態勢を解いた。

「話のわかる女性でよかった。」

「では……」

ファルコンは男を掴むと部下を連れてこの場を去った。

その姿を見送ったフィオは力が抜けたのか、地面に座り込んだ。

「どうして邪魔したんだ、フィオ。」

「王国直属部隊に手を出したらどうなるかわかるでしょっ。」

「わからん。」

「……………」

ユーイチの言葉を聞いてフィオは口を閉じることが出来なかった。
呆れてしまったのだ。

「手配書が国中に配られて私たち犯罪者になってたのよっ!!」

「別にそれでも俺は気にしないけど。」

「あんたが気にしなくても、私が気にするの。この戦闘バカが…
…」

フィオはユーイチを見てため息をついた。

「とにかく宿に帰るわよ。」

ユーイチの腕を掴んで宿屋の方に歩いて行った。

第11話 ほのぼの

「ふ」

ユーイチは今、宿屋の風呂場で湯につかっていた。体についた血の匂いを洗い流した。ユーイチ達は気にしていなかったが通りを歩いている間、町人は血の匂いが凄くて不快な思いをしていたのは言うまでもない。

「それにしても、ファルコンという男もの凄く強そうだったな。いつか、手合わせしたいな。」

ユーイチは宿屋に戻る前に出会った男の事を思い出していた。

「……………出るか。」

「湯加減どうでしたか??」

「丁度良かったよ。」

「それは良かったです。」

アレシアは笑みを浮かべ、奥の部屋に入った。そして、夕飯を手に持って戻ってきた。

「ユーイチさん。どうぞ。」

「ありがとう、アレシア。こんな遅くに悪いな。」

「いえ、お構いなく。ユーイチさんの為だったらいつでも……」

最後の方は声が小さすぎてユーイチの耳に届かなかった。

「気持ちよかった」

フィオが風呂場から出てきた。それを見たアレシアは奥の部屋に入りフィオの分の夕飯を持ってきた。

「フィオさん。どうぞ。」

「ありがとう、アレシアさん。こんなに遅くにごめんね。」

その言葉を聞いたアレシアは笑みをこぼした。

「どうしたの??」

「フィオさんがユーイチさんとまったく同じ事を言ったもので。」

「ええええええええ」

フィオは驚いた。

「うるさいぞ。ご飯を食べるときは静かに食べる。」

フィオは言い返そうと思ったが、ユーイチが黙々とご飯を食べているのを見て、自分がおなががすいてるのに気づきご飯を食べる事を優先した。

「「「ごちそうさま」「」

2人は同時に食べ終わった。

「フィオは食べるのがはやいな。」

「ユーイチの食べるスピードが遅いのよ。」

「……………」

2人は無言で睨みあったが無駄な事だと悟り、アレシアにお礼を述べて部屋に戻った。

「今日は色々な事があったね。」

「そうだな……………」

フィオ。今日の依頼で手に入れた魔法具を見せてくれないか。」

フィオは鞆の中から魔法具理^{クエスト}の番人を取り出した。

「はい。」

ユーイチは無言で受け取りしばらく見て

「ただの石像のようにしか見えんな。」

悲しげな表情で言った。

「魔法が使えない人が見たらただの石像にしか見えないからしょうがないよ。魔法具はそういうものだもん。」

「悔しいな。俺も魔法を使えるようにならないかな?？」

ユーイチの質問に首を横に振りながら答えた。

「それは無理だと思う。ユーイチには魔法の才能ないもの。」

フィオに断言されてショックを隠せないようだった。ユーイチはショックからしばらく立ち上がれそうにないのでフィオは魔法具を調べることにした。

「やっぱり……」

この魔法具ssランクだ」

「ssランク？」

いつの間にかユーイチはショックから復活していた。

「うん。魔法具にもランク（G、F、E、D、C、B、A、S、SS）が存在するのだけど、この魔法は中でも最も高いランクの魔法具なのよ……」

「凄いいじゃん。どんな力が秘められてるんだ？」

「鑑定士に頼まなくちゃわからないわ……」

どうせユーイチは知らないから説明しとくけど鑑定士と言つのは魔法具に秘められている力を明らかにする人のことだから。」

「なるほど。だったら、はやく鑑定士にみせようぜ。どんな効果があるかはやく知りたいし。」

「そうしたのは山々なんだけど……」

たぶん無理だと思うわ。」

その言葉を聞いてユーイチは「なぜっ??」という表情を浮かべた。

「この魔法具を鑑定できるのは高位鑑定士だけ。高位鑑定士はこ

の大陸に10人いるかいな。少なくとも私の知り合いにはいないわ。」

ユーイチは力が抜けて床に倒れ込んだ。魔法具の効果を知ることが出来ないことがよほど堪えたらしい。

「そ、そんながつかりする事ないって……」

旅を続ければもしかしたら高位鑑定士に出会えるかもしれないし。

「そうだな……」

じゃあ、明日ここを出発しよう。」

「えっ!?!」

ユーイチの突然の言葉に驚いたがすぐに納得した。

「そうね。この町にいてもやる事はないもんね。」

「わかってるじゃんか。せつかく、刺激を求めてこの世界に来たのに退屈したら意味ないからな。」

とにかく、明日に備えてもう寝よう。おやすみ、フィオ。」

「そうね、おやすみ、ユーイチ。」

2人はすぐに夢の世界に落ちた。

第12話 旅立ち

（上が下。下が左。左が右。右が上。この白い世界には、上下左右の概念が無かった。全てが上で、全てが下の世界。俺は、どうしてこんな世界にいるのだろうか。）

『それはここが夢の世界だからだ』

男の声がした。

（どこかで聞いた事のある声だ。）

『汝

忘れたのか』

男の声が頭に直接響いた。

（そうだ、この声は俺があの世界に行くときに聞いた声だ）

『思い出したか』

男の声が今度はこの白い世界に響いた。

『汝聞くが良い

汝が手に入れた理^{クストス}の番人

それはあの世界のありようを変えてしまうほどの力を秘めている
汝の力で理^{クストス}の番人を守るのだ』

（なんで俺がそんな事をやらなきゃいけないんだ）

『理^{クエスト}の番人は力がありすぎ

自ら災いと呼び寄せる性質がある

理^{クエスト}の番人を所持すればたくさんの災いがふりかかるだろう』

（だったら、なおの事、俺がやる理由なんかない）

『本当にそう思うのか』

（どういうことだ）

『災いとはすなわち敵』

（……………）

『理解したようだな

理^{クエスト}の番人を持っていたら強い敵が集まってくる

さすれば

汝に刺激をもたらしてくれるだろう』

朝になっていた

ユーイチは周りを見渡し自分が昨日寝た場所にいた事を確認した。

（夢か…………）

ユーイチは寝ている時に見た夢の事を思い出していた。夢なのはつきりと覚えている。夢の内容を家と言われれば一字一句間違えことなく話す事が出来るだろう。それほど、明確に覚えていたのだ。

「どうしたの？」

いつの間にか起きていたフィオがユーイチの顔を覗いて言った。

「別に。」

それより、理^{クエスト}の番人を貸してくれないか。」

フィオがユーイチに手渡すとユーイチは昨日買った袋の中に入れた。

「理^{クエスト}の番人は俺が持つけどいいよな？」

「別にいいけど。突然どうして？」

「なんとなくだ。」

（夢の中の話をうのみにするつもりはないが。少しぐらい信じても……）

ユーイチはこの世界に刺激を求めやってきた。それが、この魔法具を持っているだけで自らやってくるかもしれないのだ。ユーイチはその誘惑に勝てなかった。

2人は旅立ちの準備をした後、アレシアが用意してくれた朝食を食べた。

2人はアレシアに宿屋に泊った料金を払った。

「世話になったな。」

「いえ、そんな……」

本当にもう行ってしまふのですか??」

アレシアは寂しげな表情を浮かべながら言った。

「ああ、俺はこの世界でたくさんの刺激を見つきたいんだ。だから、ここに、ずっと滞在するわけにはいかない。」

「そ…そうですか……」

アレシアはどこか悲しそうな顔をした。

「そうだ。建物の外装の事なんだけど。」

「へっ?」

「もつときれいにすれば客がもつと来ると思うぞ。フィオは魔法が使えるから簡単に直せるし、どうする??」

「嬉しいのですが。私は、この建物が好きなので、その……」

「そっか。アレシアがこれでいいのなら、いいんだけどさ。」

「その、ごめんなさい。」

「アレシアは謝らなくていいって。」

じゃあ、そろそろ行くな、アレシア。元気だな。」

「はい。ユーイチさんもお気をつけて。」

アレシアの目にはかすかに涙が出ていた。

そして、2人光景を近くで見ている人がいた。

(何この状況。完全に私って空気じゃない。)

「フィオ、行くぞ。」

「あ、うん、今行く。」

アレシアさん、短い間だったけどお世話になりました。また会いましょうね。」

「はい、こちらこそ。」

2人はこうしてハナプトラを後にした。

「去りましたか。」

アレシアの後ろに突如男性が現れた。

「ええ。」

アレシアは気にすることなく返事をした。

「しかし、アインザームカイト孤独の庭が破られるとは驚きでしたね。」

「破られてない。」

「では、自ら招き入れたと？」

「それも、違う。」

「……どういうことでしょうか？」

男は自分がからかわれてるのではないかと考えるがすぐにやめた。アレシアがそんなつまらない事やるはずがないと知っていたからだ。

「私にもよくわからない。ユーイチ達が宿屋に入って来て破られたのかと思って、急いで術式を確認したが問題なく発動していた。一樣、他の人間にも試したけどおかしいところはなかった。」

「不思議ですねー。彼らは何者なのでしょう？」

「さあ、少なくとも今は敵じゃない。」

そう言ったアレシアの目はどこか悲しそうだった。

「で、どうしてここに来たの？」

「そうでした、忘れる所でした。幹部は全員王都に集合。これは、団長命令ですから、欠席する事は許されてませんので。」

「王都……か」

「何か問題でも??」

「いや、ない。他には」

「もうありません。」

風が吹いた。男の姿はいつの間にか消えていた。

（ユーイチさん達も王都に向かうって言ってたな）

彼女の目にはもう悲しみの色はなかった……

第12話 旅立ち（後書き）

アインザームカイト
孤独の庭

効果：この魔法をかけられたものは発動者が許可したものの意外には認識されないようにする魔法。

第13話 空の要塞へパレーオ・フリオとの戦い

「ユーイチ。本当に歩いて行くの？」

飛翔魔法を使えば王都まではひとつ飛びだよ。」

フィオの言うとおり魔法を使えばすぐに王都につく事が出来る。
では、なぜしないのか……

それは

「せつかく、目の前に危険な場所が存在するのに、そこを避けて
いくなんてもつたいない。」

ユーイチが嫌だと言っているからだ。

「俺は絶対に歩いて行くからな。」

「む」

わかったわよ。歩けばいいんでしょ歩けば。」

そう言うフィオはドシドシと音をたてながら歩いた。その直後
フィオの足場が崩れ去った。

2人は今、ハナプトラと王都の間に位置する絶望の土地と呼ばれ
ている岩山にいた。キトス・インヴィクタは普通の人間が進むには
過酷な場所だった。人間が歩くための足場がほとんどなく、あつた
としても乗れば壊れてしまうほど脆いのである。そして、その環境
で生きる為に進化した鳥型のモンスター。この2つの要因でここは
絶望の土地と名付けられた。
キトス・インヴィクタ

「それにしても、ユーイチって本当に化け物ね。」

フィオは崩れていない足場に着地した。

「そうか？」

「うん、私は魔法で体を軽量化してるから足場は簡単には壊れないけど。ユーイチは魔法を使っていないのに、どうして足場がこわれないの？」

「岩場に体重がかからないようにしている。」

「……………」

フィオは呆れていた。そんなことが出来るのかと思い、ユーイチなら出来そうな気がした。

「んっ!？」

ユーイチは岩壁の隙間を見た。

「どうしたの??」

「この隙間の奥に何かいる。」

「よし。先に進もう。」

フィオが逃げようとするが、ユーイチに腕を掴まれてしまった。

「フィオ。向こう側に行こう。」

ユーイチはフィオ腕でを掴みながら高く飛んで岩壁に上側に着地した。その直後、着地した場所が崩れ去った。

「クッ!？」

ユーイチは前へ前へ進むがすぐに岩場が崩れ去ってしまった。そして、ユーイチは比較的頑丈な岩場に移動した。

「どうやらここは他の場所と比べて頑丈なようだな。」

ユーイチはフィオの腕を離れた。フィオは無理やり引つ張られ少しふらついた。

「あ、危ないじゃないっ!!」

そう言いながらフィオは地面を蹴った。ユーイチはすぐさまその場所から離れようとするが地面は崩れる様子はない。

「フィオの方こそ危ないぞ。足場が壊れたらどうするつもりだ。」

「うつ……………」

「ごめん。ユーイチ。」

フィオは自分がした行動がどれだけ危険なことか理解したようだ。

ゴゴッ

「んっ!？」

「今揺れなかったか？」

ゴゴッ

「あ、なんか揺れた気がする。もしかして地震ッ!？」

こんな場所で地震が起これば2人はひとたまりない。

ゴゴゴゴッ

「段々、揺れが大きくなってる……」

「とにかく、空中に避難しましょう。」

フィオは持っていた杖に魔力を込めて

「デア・ラールグ
飛翔の風」

風がユーイチ達を包み込んだ。

ゴゴゴゴゴッ

「何かおかしい……」

ユーイチは空から地面を見て揺れがおかしい事に気がついた。

「何がおかしいの、ユーイチ??」

「揺れはかなり大きかった。なのに、他の岩場がまったく崩れていない。」

「あっ……!」

「私たちが着地しただけで崩れるほど脆いのはこの揺れに耐えられるはずがない。」

その直後……

「ガオオオオオオオー……!!!!!!」

ユーイチ達が足場にしていたところが突如咆哮をあげた。どうやら、ユーイチ達が足場にしていたのは岩場ではなくモンスターの背

中だったのだ。

「おおー」

ユーイチは嬉しそうな声をあげた。

「あれは、なんて言うモンスターだ??」

「バレーオ・フリオ
空の要塞……」

危険度Bのモンスターよ」

「じゃあ、バレーナ・レアーレ砂漠の王と同じくらいの強さか。
燃えるぜー……っ!!!」

フィオ、この魔法を解いてくれ。このままじゃ、移動できない。」

「解くって……」

戦うつもりなのっ!？」

「当然。その為にここを通ったんだから。」

フィオは何か言いたげだったが言っても無駄だと思い解くことにした。直後、ユーイチの体は落下すると思われたがしなかった。ユーイチは空中に立っていた。

「ど、どうなってんだ!？」

ユーイチは自分が空を歩けるようになったかと思い驚いたが、フィオが魔法を発動しているのに気がつきそれは違うと理解した。

「何をしたんだ??」

「ヴィント・ヘルシャー風の支配者。この魔法は自由自在に風を操る事が出来るの。だから、足場だって作れるすぐれもの。でも、この魔法はたくさん魔

力を消費するから長い時間は持たない。せいぜい、30分が限界だから。」

フィオの顔にはうつすらと汗がにじんでいた。

「30分もあれば余裕だ。」

ユーイチは空の要塞に素手で立ち向かった。

ユーイチが近づくと空の要塞の体にたくさんの穴が出現し風の槍ヴァイント・シュピースをユーイチに向かって放った。

「クツ、ハツ!!」

ユーイチは体を動かして敵の攻撃を避けている。そして、避けた先に風の槍が飛んできた。

「チツ!!」

（これは避けきれん）

態勢が崩れていてユーイチでも避けきれない。腕を体の前でクロスし、攻撃を受け止めようとする。

ゴオオオオーーーー

直後、突風が吹きユーイチの体を横にずらた。そして、その横を風の槍を通り過ぎた。

「フィオ。助かった。」

いほど傷ついていた。

タンッ

（背中に取りつけたが、どうやってこいつを倒すか……）

「危ない。ユーイチッ！！」

「んっ！？」

ユーイチに向かって風の槍が放たれていた。ユーイチは攻撃を空
の要塞の背中を走った。
ヴァイント・シュビース
イオ・フリオ

トドトドトンッ！！！！！

風の槍が空の要塞の背中にぶつかる音がした。しかし、風の槍が
ぶつかった場所には傷一つなかった。
ヴァイント・シュビース

（背中は頑丈と言うことか）

「……………」

そして、背中に穴があきユーイチに向かって風の槍を放った。
ユーイチはその光景を見ながら考えて

「そうだっ！！」

ユーイチはある事を考えついた。

「フィオ。一瞬で良い。次のこいつの攻撃を防いでくれ。」

ユーイチの言葉を聞いたフィオは頷き手に力をいれた。そして空^{バレ}の要塞の背中に穴が出現した。それを見た、ユーイチは穴に向かって走った。そして、ユーイチに向かって風^{ヴァイント・シュピース}の槍が放たれた。それを見てもユーイチは走る速さを緩めなかった。

「ハアアーーーーーッ!!」

フィオは声をあげてユーイチの目の前に自ら作り出した風による盾を出現させた。風^{ヴァイント・シュピース}の槍がぶつかってもその守りに揺らぎは見えなかった。風^{ヴァイント・シュピース}の槍による攻撃を完全に防いだ。

風^{ヴァイント・シュピース}の槍の攻撃が止まった。空^{バレオ・フリオ}の要塞の背中に出現した穴が消え始めた。

「クソッ!!」

間に合えーーーーーッ!!!!!!」

ユーイチは穴の中に頭から飛び込んだ。ユーイチは穴が完全に消える直前に穴の中に入る事に成功した。

（ユーイチの奴、無茶しちゃって。じゃあ、こつちも頑張りますか）

フィオは顔を流れている汗を拭い、空^{バレオ・フリオ}の要塞がフィオの事を見たのを確認して杖に魔力を込めた。

パレオ・フリオ
空の要塞内部

「ふう〜」

ユーイチは空の要塞の内部に侵入することに成功した。

「それにしても、真っ暗でよく見えん。」

ユーイチは迷路のような空の要塞の内部を進んでいた。ユーイチが内部を歩いていると突如光が差し込んできた。光はユーイチが通ってきた方角からきていた。直後、風が吹いてユーイチを空の要塞の内部深くへと運んで行った。

パレオ・フリオ
空の要塞の外部

空の要塞の背中に穴が出現しフィオに向かって風の槍を放った。

「ハッ!」

フィオは自分の周囲の風を操り風の槍を防いでいた。

ユーイチが空の要塞の内部に入ってからすでに10分経っていた。戦闘時間の合計はすでに25分に達していた。

（ユーイチはやく……。もう、やばいかも。）

フィオの顔にはもう余裕が無かった。

バレーオ・フリオ
空の要塞内部

「痛〜。」

ユーイチは体をさすりながら言った。風で運ばれた後、突如逆風が吹いてユーイチの体を壁に叩きつけたのだ。それが何度も起こったのだ。

（俺って本当に運がいいぜ）

ユーイチは今、バレーオ・フリオ空の要塞の肺の中にいた。

ドクンッ！！ドクンッ！！

肺の外から音が鳴りやむ事なくなっていた。

ドクンッ！！ドクンッ！！

ユーイチはその音が一番大きく聞こえる場所に移動した。

（ここか。ここに、奴の心臓がある。）

ユーイチは力を一瞬抜いた。心臓があると思われる場所を見、そして左腕をひき。

「ッ！！！！！！！」

目が飛び出してしまうのではと思えるほど見開き。腕に持てる限り

の力を込めて拳を放った。

バレオ・フリオ
空の要塞外部

すでに、フィオの魔力は尽きかけていて、飛んでいるので精いっぱいだった。

バレオ・フリオ
空の要塞の背中に穴が出現した。

（私もここまでかな……）

フィオは諦めようとした時

ドーーーーンッ！！

「ガアアアーーーーッ！！」

バレオ・フリオ
空の要塞の方から大きな音が聞こえた。バレオ・フリオ 空の要塞を見ると体をねじっていた。体に走った強烈痛みに耐えられないようだ。

ドーーーーンッ！！

「ガアアアーーーーッ！！」

バレオ・フリオ
音が鳴る度に空の要塞が体をねじり口から大量の血をはいていた。

「そろそろ、外かな？？」

フィオはユーイチの声が聞こえてたような気がした。直後、今ま

でで一番大きな音がした。そして

「ガアアアアアーーーーー………」

ドドドドドオoooooooo

バレオ・フリオ 空の要塞は悲鳴をあげながら地面へと落下した。大地は空の要塞 バレオ・フリオ の重さに耐えられず、崩れ去っていった。空の要塞は絶命した。

「ユーイチッ!!」

フィオは力を振り絞って空の要塞に近づきユーイチを探した。

「ユーイチッ!!」

ユーイチ聞こえてるっ!?
聞こえてるなら返事してっ!」

「聞こえてるよ。」

フィオの大声の呼び掛けにユーイチはだるそうに返事した。

「よかった。ユーイチ、無事でよかった………」

「お互いにな………」

バレオ・フリオ 2人は空の要塞の背中の上で抱き合った。フィオは今まで色々な敵と戦ったが空の要塞のように強いモンスターと戦うのは初めてだったのだ。自分よりも強い敵と戦う恐怖。ユーイチと自分が死ぬかもしれないという不安。そんな不安を抱えて戦っていたのだ。その不安から解放されて、涙を我慢できずにボロボロと流していた。

第13話 空の要塞へパレーオ・フリオとの戦い（後書き）

ヴィント・ヘルシャー
風の支配者

効果：発動者の半径200mに存在する風を自由に操る事が出来、また魔力を風に込めることで風に実体を持たせる事が出来る魔法。魔力の量によって強度が変わる。ただし、他の生き物が魔力を込めた風は操る事はできない。

第14話 復讐を誓うもの

「クソがああああー」

男は頭を抱えながら叫んだ。よく見るとこの男はギルドの受付番をしていた男だ。

「なぜだつ。なぜだつ。なぜだつ!!」

砂漠の王だけでなく空の要塞までもあんな小童たちに殺されるんだつ!!」

「そこまで怒る事でしょうか。エヴァルトさん??」

アレシアの元に現れた男性が問いかけた。

「怒るに決まってるだろつ!!!!」

あいつらは……。あいつらはおれの大事な大事な息子たちを殺したんだぞつ!!」

黙ってなんかいらねえ!!」

エヴァルトは怒り狂っていた。周りにあるものを投げ、そして壊して自分の精神を保とうとしていた。

（息子ね……）

男性はエヴァルトの事を汚物のように見ていた。

「まあ、ほどほどにしといてくださいね。片付けるのが大変なので。」

しかし、男性の言葉はエヴァルトの耳には入っていなかった。

（そんなだから感情に任せ、自分より強い奴に襲いかかるという愚行をおかすのだ。）

「とにかく、エヴァルトさんは計画が成功するまでここから出ないでくださいね。」

「何っ!？」

ふざけるな!!

俺は今すぐあいつらを殺しに行く。おまえの言う事なんか聞くな!!

エヴァルトはそう言ってこの部屋を出ようとするが

「これは団長命令ですから。」

「ッ!」

この言葉を聞いて足を止めた。この者たちの中では団長命令は絶対のようだ。

「……わかった。」

「それは良かった。では、私はこれで。」

そう言って男性は忽然と姿を消した。扉を使った形跡はなかった。

「うがあああーーーーー」

エヴァルトは大粒の涙を流していた。それほど、バレエナ・レアーレ 砂漠の王と空の要塞・フリオに対する愛は大きかったのだ。

「絶対に殺してやる……」

エヴァルトはユーイチ達への復讐を心に決めた。

第15話 王都での戦い その1

パレオ・フリオ
空の要塞を倒したユーイチ達は今、キトス・インヴィクタ 絶望の土地を抜けてから少し進んだ町に滞在している。

「ああ……。どうして、あんな恥ずかしい事をしちゃったの……。」

フィオはユーイチの前で泣いてしまった事を思い出して頭を抱えていた。ここ最近こんな調子だった。

さらに、ユーイチの前に出るとあの時の事を思い出してまともに顔を見れずにいた。対するユーイチは

（なんで、俺はフィオに助けを求めてんだ！？ 強い奴と戦いたいと言ったときながら、他人に助けを求めるなんて情けない……。今度は絶対そんなことしないっ！！）

と考えていた。

それから、2日間この町で休息をとり、2人はこの町を後にした。

「フィオ、ここ最近おかしいぞ。」

「そ、そうかな……。」

ユーイチ達は王都の入口に続く一本道を歩いていた。

「ああ、おかしい。今までは目を見て話してたけど、最近は目を合わせてない。むしろ、故意にそらされてる気がする。」

ユーイチがそう言いながらフィオの顔を覗くと、フィオは顔を赤くしてそっぽを向いた。

「ほら、そらした。」

「そ、そんな事ないわよ。」

若干フィオの声が上ずっていた。動揺しているのが見え見えだった。

ガサッ

「ッ!？」

茂みが揺れたと思ったら、黒服の男がユーイチに向かって剣を振りおろした。ユーイチはその攻撃をギリギリのところかわし、襲撃者の武器を持っている手を思いつきたたきつけた。その衝撃で襲撃者は剣を落としが、襲撃者は剣を拾わず森の中に逃げ込み、すぐにその姿が見えなくなった。ユーイチなら追えば捕まえることは出来たのだがしなかった。ユーイチはそれが無意味な事だと知っていたからだ。

「またか。これで何回目だ。」

「たしか、今回で10回目だと思うよ。」

フィオ達が黒服の男に初めて襲撃されたのは絶望の土地キトス・インヴィクタを抜けた後に滞在した町を出発してから、ほんの2時間程度経った後だった。このときは、ユーイチは襲撃者に襲われたことに興奮して思わず半

殺しにしてしまった。そのせいか、話を聞こうとしたときには絶命してしまっただ。次に襲われたのは、それから、3時間後だった。その時は、前回の事もあり（フィオにこっぴどく叱られたので……）手加減して、襲撃者に大怪我させず、捉えることに成功した。しかし、話を聞こうとしたら自ら舌を噛み自決したのだ。その後も、襲撃が続くそのたびに襲撃者を捉えるがすぐに自決するので、ユーイチ達は襲撃者を撃退するだけで捉えるのはやめたのだ。

「同じ事が続くとあきてくるな……」

ユーイチはため息をついた。

「でも、どうして襲われるんだろう……」

「追剥か。何かじゃないのかー」

「だったら自決することないじゃない。」

「それはそうだが……」

もう、こんなくだらない事考えるのやめようぜ。つまんないし。」

「くだらないって……。命を狙われてるのよ、私たちっ！

その事をちゃんと理解してるの、ユーイチは。」

「理解してるって。でもさ、奴らに話を聞こうにも自決しちゃうんだから情報がまったく手に入らないだろ。情報が無いのに考えてもそれは敵に対する恐怖心をおおる以外のなにものでもない。」

ユーイチの言葉は正論だったのでフィオは納得せざるおえなかった。

（そうかもしれないけど。少しは、気にかけてくれても。私は女の子なんだから……。）

「ッ……！」

「どうかしたか？」

「な、何でもないよつ。」

「そうか。」

（私、何考えてるの。これじゃ、まるでユーイチに気があるみたいじゃないっ！？）

フィオは頭を横に振り頭に浮かんだ考えを外に追い出した。その光景を横から見ていたユーイチは

（フィオも疲れてるんだろう）

と一人で納得し、黙っていていることにした。

2人が襲撃者に襲われてから約2時間ほど歩き王都に到着した。

「うおおー。門でかつ！」

ユーイチは門の大きさに驚いていた。それもそのはず、その門の大きさは高さ300mもあり、同じ高さぐらい城壁が王都を囲んでいたのだから。

「ユーイチ、恥ずかしいから大声出すのやめて。」

フィオもユーイチとようやくユーイチの顔を見て話せるようになった。（まだ、恥ずかしさは残っているが）

「おう。じゃあ、はやく中に入ろうぜっ！」

ユーイチが門をくぐろうとすると

「お待ちください。」

門番がユーイチに話しかけた。

「ん??」

「王都に入るには身分を証明するものが無ければ入る事が許されて
いません。身分を証明できるものを提示してください。」

「身分を証明できるもの…。フィオどうすればいい??」

フィオは少し怪訝な表情をしていたがユーイチに尋ねられるとい
つもの表情に戻り

「ギルドカードでいいんじゃない。」

「なるほど。」

ユーイチはポケットに手を入れ、ギルドカードを取り出して門番
にみせた。

「……………。確かに本物のようです。」

ギルドカードを返されポケットにしまった。同様にフィオもギル
ドカードを提示した。

「……………。こちらも本物のようです。ではお入りください。」

門番はフィオにギルドカードを返却し魔法を使って門の扉を開け

た。ユーイチ達が門をくぐるとすぐに扉は閉まった。

「……………。ここが王都か？」

ユーイチが疑問に思うのもしようがない。王都なのに人通りが少なく店もほとんどが閉まっているようだった。

「王都ってこんなに人がいないのか？」

「そんなことありえないけど。普段は混雑しすぎて通りのどこに何があるのかわからないぐらいだもの。それに、おかしいと言えばさっきのやり取りもおかしいは。」

「そうか？ 俺は別におかしいと思わなかったけど……………」

「やり取り自体はおかしくなかったわ。そもそも、1か月前に1人で来たときはあのやり取りが無かったもの。急にするようになるなんて…、こんなに人がいないのと何か関係があるのかもしれないわ。」

「だったら、話を誰かに聞けばいいんじゃないか？」

ユーイチはそう言ったが自分から聞きに行こうとしなかった。しようがないので、フィオは通りの端を歩いていた女性に話しかけた。

「なんだい??」

女性は怪訝な顔をしながらフィオの事を見た。

「どうして、昼間からこんなに人がいないの？」

「そんなのあんな噂が流れれば外を出歩こうなんて誰も思わないよ。私だって食べ物か底を尽きかけなければ出歩こうなんて思わなかっただろうし。」

「噂？ 噂ってなんだ。俺たちここに来ただけで知らないんだ。」

教えてくれないか。」

その言葉を聞くと女性はあからさまに嫌な顔をした。

「噂っていうのは、この王都にテロリストが現れて城を爆破するって噂だよ。実際、この前、城にやってきた貴族の乗り物が爆破されただよ。そのせいで、たくさんの市民が犠牲になったんだ。もういいかい。はやく帰りたいんだけど。」

「うん。ありがとう。」

フィオの返事を聞く前に女性は早足で家へと帰宅した。

「だってさ、ユーイチ。」

ユーイチの方を見るとユーイチが目を輝かせていた。

「テロリスト。これは戦いの予感。」

「言つとくけど私は嫌だからね。」

「ああ、フィオは捲き込まない。俺一人で戦うぜ。」

「え……、そもそも、テロリストが戦いを仕掛けるとは限らないよ。もしかしたら、爆弾だけ仕掛けて逃げるかもしれないし。」

その言葉を聞くとユーイチの顔は絶望に染まった。

「とにかく、宿屋を探そ。王都まで来て野宿なんてシャレにならないんだから。」

ユーイチの手を引っ張ってフィオは宿屋を探し始めた。

「本当にどこも開いてないのね。宿屋どころか雑貨屋も開いてないじゃない……」

「これじゃ野宿だな。食糧も森に行って狩ってくるしかないか。」

「いやよ。王都まで来て野宿は。ひさしぶりにまともなお風呂に入れると思ってたんだから。」

「だったら、さっきの人にきけばよかったものの……」

「うっ……」

フィオはユーイチの正論が胸に刺さった。そして、聞こえなかったふりをして通りの奥を見ると視界の端に開いている店を見つけた。フィオがいる場所からざっと300mぐらいの場所である。よく見ると、その店は今まさに扉を閉じようとしている。

「っ！？　せつかく見つけたのに、逃してたまるかつ！！」

そう言つてユーイチを引っ張る様は乙女とは程遠いかった。

「待つてー！。閉めないでっ！！」

フィオの声が聞こえたのか店の主人は扉を閉めるのをやめた。

「ん。お客さんかい。悪いんだけどもう在庫は無いんだよ。すまないね。」

店の主人は本当に申し訳なさそうに謝った。

「在庫？」

「食べ物在庫だよ。食べ物を買いに来たのだから？」

「あ、違うの。私たち宿屋を探してて、ここが宿屋かもって思った

の。ここら辺に宿屋ない？」

「うゝむ……。開いてないと思うぞ。テロがあつてから王都に来る人が少なくなつたからの」

「そ、そんな〜。」

フィオはその言葉を聞き、ショックのあまり地面にしゃがみこんでしまった。

「野宿決定だな。」

ユーイチがとどめの言葉をフィオにたたき込んだ。しばらく、立ち直れそうになかった。その言葉を聞いた店の店主は中に入ったかと思うと一枚の紙を持ってきた。

「あんたら。この紙に書いてある場所に行きなされ。そこなら、閉まつていても泊まらせてくれると思うぞ。」

「本当!？」

フィオは一瞬で復活した。

「ああ。だが、高い金額をとられるかもしれないが。」

「いいよ別に。泊まれるならいくらでも出しちゃう。」

フィオは店の店主から紙を受け取り、店主にお礼を言って書かれていた場所へと向かった。

「ここみたいだね。」

店の店主に教えられた店は案の定閉まっていた。

「すみませーん。誰かいませんか？」

フィオが扉をノックしながら言うと、中からどたどたと音がして扉が思いっきり開いた。

「はい。どなたですか？」

若い女性が出てきた。

「えっと。私たち旅人なんですけど。宿屋を探しててさっき出会ったおじいちゃんがここなら泊めてくれるって教えてくれたんですが……」

「旅人さん。大歓迎だよ。ささっ、入って入って。」

ユーイチ達の背中を押して店の中に入れた。

「ひさしぶりのお客さんだー。うれしーなー。」

女性は笑いながら踊った。相当嬉しいようだ。

「あ、あの……」

「おっと、ごめんごめん。自己紹介がまだだったね。私の名前はキユア。よろしくね。」

「私はフィオで連れがユーイチです。よろしく。」

「じゃあ、部屋に案内するけど。お代はこれだから。」

フィオはキユアが提示した金額を見て目を点にした。あまりにも高額だったがここ以外で泊まれるところ知らないので我慢すること

にした。

「ふう。疲れた。」

フィオはベッドに倒れ込んだ。

「ん。やわらかくてきもち。今日は疲れたしこのまま休もつか

……」

「そうだな。」

2人はそのまま眠りに入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538y/>

異世界に刺激を求める者

2011年11月23日13時52分発行